

《表面》



「書
央書
書書」

【釈文】

《裏面》



「
□
□
□
□」

【釈文】

【古代の九九】

国内で九九の書かれた資料が現われるのは奈良時代頃で、中国から伝わったと考えられています。

当時の九九は私たちが知る九九とは逆に、九九八十一、八九七十二から始まり、掛けられる数が一つずつ小さくなっていきました。また、数字の前後を入れ替えたものは省略されていました。

写真5 S D 66 から出土した習書木簡（右は赤外線写真）



写真6 出土した墨書土器

【まとめ】

今回の調査では、奈良時代の遺構から3点の木簡と6点の墨書土器が出土しました。中でも、土坑S X 77 から出土した九九木簡は、九九のみが記され、計算間違いもないことから、九九一覧表のような用途が想定されます。四の段以下が記されていないのは、完全に暗記していた必要としなかったからかもしれません。

遺跡の所在する「丹波」は旧丹波国の国名の由来となった地名で、丹後国が丹波国から分立される和銅6年（713）年以前の旧丹波国の中心地と考えられており、官衙のあったことが想定されます。官衙においては、徴税管理などに文字や計算の知識が必要であり、今回の調査で出土した九九木簡を含む多くの文字資料は、地方官衙で働く役人の姿を想像することができる貴重な資料です。



公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

京埋セ報道発表資料 22-2

令和4年7月25日（月）

つるお 霧尾遺跡 第2次調査

調査遺跡 霧尾遺跡
調査場所 京都府京丹後市峰山町丹波
調査期間 令和3年11月25日～令和4年3月4日
調査機関 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

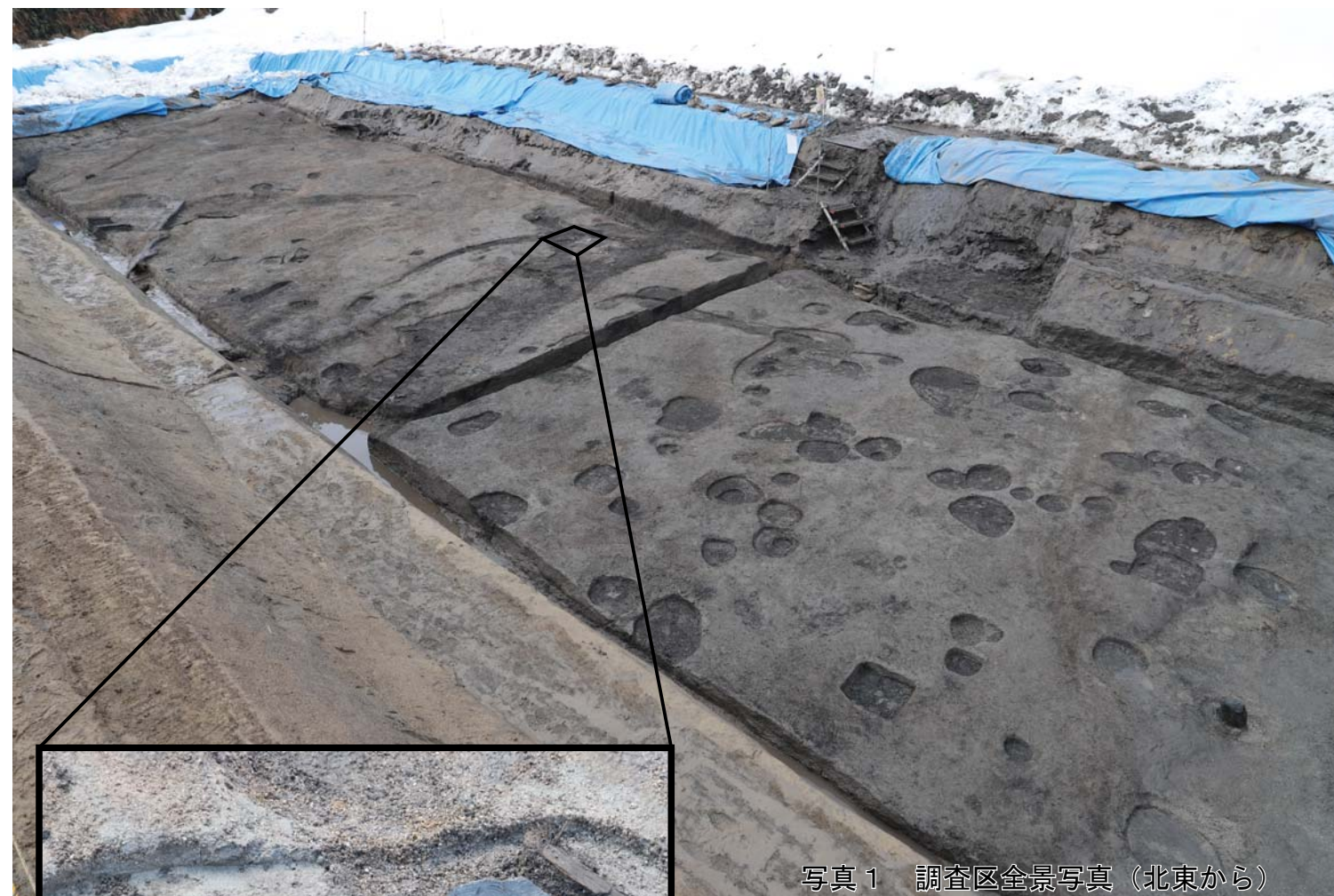
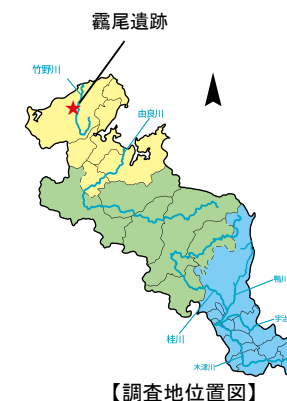


写真1 調査区全景写真（北東から）



写真2 九九木簡出土状況（東から）

霧尾遺跡は丘陵に取り囲まれた谷部に立地します。今回の発掘調査では、主に奈良時代の遺構や遺物が見つかりました。

中でも、九九が書かれた木簡は、九の段から五の段までがほぼ完全に記されており、日本国内で80例ほど見つっている九九木簡の中で、最も多くの九九を記したものです。

このほかにも2点の木簡と6点の墨書土器が出土しており、旧丹波国の中心地とされる「丹波」地内に位置することと合わせて、当遺跡に官衙的な施設があったものと考えられます。

【調査の概要】

今回の調査では、奈良時代の溝や多数の土坑などを確認しました。

調査区は、南北約 40m、東西約 13mで、調査面積は約 500 m²です。縄文時代から鎌倉時代までの遺物が出土する厚さ 0.5mほどの遺物包含層の下から、奈良時代の遺構面を検出しました。

調査区のほぼ中央で検出した幅約 1.2m、深さ約 0.4mの溝 S D72 は両岸に若干の盛り土が確認でき、数本の杭が打ち込まれています。溝より北側に遺構が集中していることから、この溝がなんらかの区画を表す溝と考えられます。溝の北側の遺構群には柱根を残した柱穴が数か所見つかっており、掘立柱建物があったと考えられます。

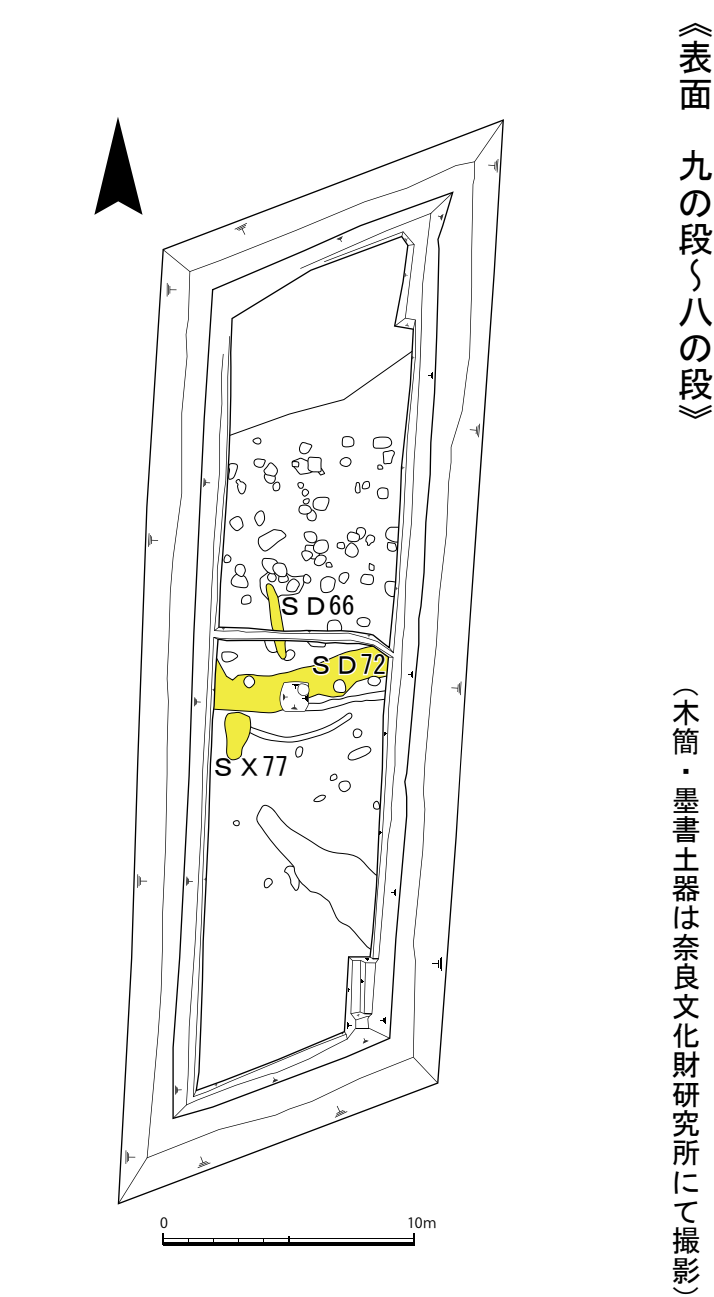
土坑 S X77 から九九木簡が、区画溝 S D72、溝 S D66 からそれぞれ木簡が出土し、周辺から「大」、「大」、「工」、「西」、「倉?」、「政?」と書かれた 6 点の墨書土器が出土しています。



図 1 調査地位置図 (S=1/25,000 国土地理院『峰山』)



写真 3 調査地遠景 (南東から)



《表面 九の段〜八の段》

(木簡・墨書土器は奈良文化財研究所にて撮影)



【釈文】

九九八十一 八九七十二 七九六十三 六九五十四 五九卅五
四九卅六 三九廿七 二九十八 一九如九 八々六十四 七八五十六
六一 一五〇〇 四八卅〇 三八廿四 二八十六 一八如八

〔八卅か〕 〔二か〕

《裏面 七の段〜五の段》



【釈文】

七々卅九 六七卅二 五七卅五 四七廿八 三七廿二 二七十四
一七如七 六々卅六 五六卅 四六廿四 三六十八 二六十二
一六如六 五々廿五四 五廿三 五十五 五十二 五十一 一五如五

図 2 霧尾遺跡遺構配置図 (S=1/300)

写真 4 SX77 から出土した九九木簡 (右は赤外線写真)